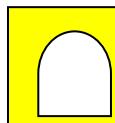


日吉台地下壕保存の会会報



第148号
日吉台地下壕保存の会

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム 東京東大和大会（オンライン開催）報告

副会長 亀岡敦子

2021年10月2, 3日、第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会が、初のオンラインで開催された。2020年現地実行委員会は全ての準備を整えていたにも拘らず、新型コロナウィルス感染症拡大のため1年延期となった。それでも通常の大会開催は不可能で、ついに、オンライン大会となった。東京の西北部である多摩地区には多くの軍関係施設や軍需工場、空襲被害を物語るものなど、今も多くの戦争遺跡が残されており、全国から集う参加者は、大きな刺激を受けるはずだった見学会は中止となった。何度もオンライン会議を重ねての実施となり、2日間スムーズな進行で大会を終えることができたのも、現地実行委員会の奮闘に負うところが多かった。

第1日目（10月2日）全体会

まず現地実行委員会から、オンライン大会参加に際しての説明や注意があった。独特の言葉や決まり事があり、PCを通じていつものように聞いていればよいらしいとは分かったけれど、妙に緊張してしまった。次に市長の歓迎の挨拶があり、市をあげて「旧日立航空機株式会社変電所」の保存と活用に取り組んでいるだけに、熱のこもった挨拶であった。それから10時から14時まで、1時間の昼食休憩をはさんで初日の行事が行われた。

◎記念講演 「戦争の記憶から記録へ」 加藤聖文（国文学研究資料館准教授）

この講演は、私たち戦争の実相をなんとか次世代へ継承しようと努めているものにとって、相応しいテーマで、講演内容について加藤氏は以下のように記している。

第二次世界大戦から75年以上も過ぎた今日、これまで同時代の出来事として共有していた戦争体験が過去の歴史となり、世代間で「戦争」そのものをめぐる認識の共有が難しくなっています。私たちにとって、これからは戦争をイメージ出来ない世代に過去の戦争体験をどう伝えていくかといった課題に向き合わなければなりません。講演ではこのような前提に立って、なぜこれからも戦争体験の継承に取り組まなければならないのか、また戦争体験を伝えるには具体的にどのような課題が横たわっているのか、その課題をどう乗り越えていくべきかについて、戦争犠牲者の記憶の継承、そして戦争に関わる記録を公共財として社会が保存していく必要性を軸に具体例を挙げながら考えていきます。

【目次】

<u>報告【1-4p】</u>	第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会 (オンライン開催) 報告	副会長 亀岡敦子
<u>調べました【5p】</u>	軍人墓のこと	運営委員 佐藤由香
<u>資料調査【6-7p】</u>	海軍瀬谷補給工場	ガイド 岸本 正
<u>報告【8-10p】</u>	小笠原の戦争遺跡（母島・父島）	ガイド 中田 均
<u>連載【11-15p】</u>		
☆日吉第一校舎ノート(23)『僕の昭和史』(1)	会長 阿久沢武史	
☆設備アレコレ(32)第300設営隊その後	運営委員 山田 譲	
☆海外の戦跡めぐり(18)阿片戦争と南京条約	運営委員 佐藤宗達	
<u>お知らせ【15p】</u>		
コロナ感染対策で、こんな風に案内しています		
(慶應義塾高校の見学会から)		
副会長 喜田美登里		
<u>活動の記録【16p】</u>	2021.8~11月	

空襲被害・勤労動員・学童疎開・引き揚げ体験・戦後の市民生活、などのように、個人的な「記憶を記録」とし、それをなんとか非体験者が自分の身に引きつけて考えることによる継承がある。また、戦争遺跡のようなモノを通して、それを記録化し伝えることにより、その前に立つ人が、戦争について考えるという継承がある。戦争体験のない世代が中高年となり、それでも何とか次世代に継承する場合には、困難ではあるが、誇張や感情に流されない事実を、冷静に伝えることではないかと思う。

◎基調報告「戦争遺跡保存の現状と課題 2021 —保存問題を中心に—」

出原恵三（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）

続いて出原氏による最新の保存状況についての報告があった。まず国内外での戦争遺跡に関する認識の違いにふれ、次に国内で今おきている保存問題についての解説があった。

(1) 旧陸軍広島被服支廠倉庫群（広島県）は、2年前には4棟中1棟のみ保存し他は解体すると決めていた広島県が、2021年6月全棟耐震工事を施し保存と決定した。(2)旧第32軍司令部壕跡（沖縄県）この壕は首里城地下にあり、2019年の首里城焼失により埋もれたままとなり、学術調査を行った上で公開を求める署名活動が行われている。ほかに、(3)沖縄南部戦跡の土砂掘削（沖縄県）、(4)「大社基地」滑走路跡（島根県）、(5)登戸研究所跡（神奈川県）の現状と、調査事例4件の報告があった。市民の声が行政を動かす、という事例を知ると、何となく勇気が湧いて来るようと思える。



旧日立航空機株式会社変電所

◎地域報告1

「多摩地域の戦争遺跡」 齊藤 勉（浅川地下壕の保存をすすめる会）

戦後と呼ばれる時代を大きく25年ごとに区切り、戦争や戦争体験がどのように伝えられ変化したかを述べたのちに、多摩地域の発展に戦争がどのように関わったか説明された。昭和初期に広大な土地に陸軍飛行場が開設し、それから陸軍関係施設が次々作られて立川を始め多摩地域は軍都となつた。従って忠魂碑をはじめとする碑も多く、空襲被害の跡も残っている。その代表的な戦跡として弾痕の残る旧日立航空機変電所があげられる。



◎地域報告2

「大規模修繕後の旧日立航空機変電所」

後藤祥夫（東大和・戦災変電所を保存する会）

まず、この変電所の概要が示され、軍需工場建設までの背景と経緯が述べられた。空襲も3回あり、建物はもちろん社員や隣接する社宅住人にも被害がでている。この戦跡の特異な点は、都立東大和南公園の一角にあり、子どもたちが遊ぶすぐ傍に、明らかに弾痕とわかる穴だらけの古い建物が残されていることだ。戦後の保存までの歴史についても丹念に述べられ、1995年10月1日、変電所が「東大和市指定文化財」となるまでを知ることができた。そこには重要性に気付いた人たちがおり、すぐに公民館で「太平洋戦争と郷土」という講座を開いた人たちがおり、受講した人たちがおり、行動に移した人たちがいたのだ。



第2日目（10月3日）分科会報告

いつもとは勝手の違うオンラインでの報告をしなければならないので、やはり報告希望者は少なく8人だった。しかし、リハーサルを重ねながらやり遂げた報告は、初めて知る内容も多く、興味深い物であった。

◎第1分科会：保存運動の現状と課題

(1) 「山梨県の戦争遺跡と朝鮮人労働者の動員」

鮎沢 譲（山梨県戦争遺跡ネットワーク）

山梨県内には多くの地下壕が掘られ、飛行場などの軍施設も開設されたが、それらの建設に動員された朝鮮人労働者についての調査報告である。それぞれの地区での労働や死亡状況など、丁寧な調査がされていることに感銘を受けた。

(2) 「本土決戦準備期における湘南～二宮・大磯・鎌倉の戦争遺跡の現状」

中田 均（浅川地下壕の保存をすすめる会）

温暖で風光明媚な湘南は、おしゃれな地域として人気が高いが、ほんの76年前には米軍上陸を迎えたための様々な陣地が構築され、いまもかなり多くの戦跡が残されている、戦争を語る地でもあるのだ。実際に歩いて写した多くの写真を見ながら、何となく自然の中に紛れ込ませてはいけないと思った。

上：取り壊された給水塔（昭和63年撮影）

下：部分保存されている給水塔

(3) 「海軍山陰航空隊大社基地跡の現況と今日までの保存活動」

西尾良一（平和を願い島根の戦跡を語る会）

出雲市大社に残る海軍飛行場は、1945年3月から6月の3カ月で完成された1500メートルの滑走路を持つ基地である。その滑走路が存続の危機にあるという。直線道路がかつての滑走路の一部である、というのは割合多いが、そのままの長さで残ってほしいものだ。

◎第2分科会：調査の方法と整備技術

(4) 「横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊のレーダー基地」

工藤洋三（会員 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議）

宅地開発などに伴い日本軍のレーダー基地の遺構が見つかることから、報告者は欧米にくらべて遅れていたと言われる、日本のレーダー開発について、米国資料を基に横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊のレーダー基地を詳細に調査した。そして、戦争末期にはかなりの技術開発が進んだけれど、担当者養成などシステムが間に合わなかったのではないか、という初めて知る内容であった。

(5) 「九州における遥拝遺構と熊本県の現状」

高谷和生（くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク）

戦時中のドキュメンタリや映画の中で、「宮城遥拝！」という掛け声で将兵、学生生徒や一般国民が一斉に同じ方向に最敬礼する様がみられる。この報告で、陸軍歩兵連隊や陸軍幼年学校などの遥拝所という決められた場所があり、皇居の方角を示す方位台があり、熊本や久留米に遺されていることを知った。これも国民の精神動員を示す大切な遺構であろう。

(6) 「松本市里山辺地下壕の崩壊と修復、および内部構造・地質」

平川豊志（松本強制労働調査団）

長野県には疎開工場跡が残っており、松本市里山辺地下壕も見学できる、工場跡である。それが2020年7月の大雨で入り口上部が崩壊するなど、見学にも支障をきたし、その修復の様子が報告された。内部には断層があるなど、全国の様々な地下壕にとっても、深刻な課題だと思われる。

◎第3分科会：平和博物館と次世代への継承

(7) 「東京裁判開廷75周年を迎えて 一東京裁判の〈遺産〉を継承する一」

春日恒男（会員 防衛省・市ヶ谷記念館を考える会）

第3分科会は、「モノ」の継承ではなく、歴史の見方や歴史から何を学びそれを次世代に伝えるかの報告の場である。東京裁判は、ドイツが裁かれたニュルンベルク裁判と共に日本の戦争責任が問われた裁判であった。日本国内では評価が様々に分かれるが、その後の悲惨な内戦や戦争を裁く基準としての役目を持つことを初めて知った。貴重な報告である。

(8) 「[PTSDの日本兵と家族の交流館] がめざすこと」

黒井秋夫（PTSDの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会）

報告者と7年もの従軍経験のある無口な父親との、心通わぬ関係は、実は父のPTSDのせいであることを知り、多くの苦しむ家族のために気楽に集える場を作った、実践報告であった。交流館は近隣の人たちや特に子どもたちに開かれており、届託なくおしゃべりをしながら、無理なく戦争について学んでいる。心打たれる実践と感銘を受けた。

オンライン大会は、不便な点も多くあるが、全国大会のその日にその場に行かれれない人には、有難いものだと思う。病気でも遠方でも可能なのだから。しかしやはり顔を見て、言葉を交わす嬉しさは、何物にも代えがたい嬉しさだと確信した。来年はどうなるのやら。

調べました

軍人墓のこと

運営委員 佐藤由香

軍人墓と聞いて、みなさんは何を思い浮かべますか？

先日（4月6日）参加したフィールドワークで、滝の院墓地の戦死者のお墓をいくつか見ましたが、それが私の思い描いていたものとは違っていました。

私の軍人墓のイメージは、一般の墓石とは異なり一目でそれとわかるものです。

地域性もあるのでしょうか？母方の祖父母の故郷滋賀県守山市にある軍人墓はてっぺんが四角錐になっています。多くの軍人墓の側面に刻まれた内容は下記の通りです。

正面…階級、氏名

左隣り…死亡場所、死亡年月日、行年

右隣り…戒名

裏面…建立者名

階級に関係なくサイズも同じ。石材は真っ白で少しゴツゴツした感じと記憶しています。そこで、私が知っている軍人墓はどのようにして作られたのか調べてみようと思いました。以下は、レファレンス協同データサービス（国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築する検索サービス）より得られた情報です。

1874年（明治7年）10月、陸軍省が「陸軍埋葬地ニ葬ルノ法則」により墓碑の規格を統一制定。以降、四角柱に頭部が方錐型の形態になった。

1886年（明治19年）6月の海軍省令にも頭部が方錐型の墓石を図示したものがある。

頭部を方錐形にした理由は、剣先を模したという説、儒教や神道の影響、木柱の先頭の腐蝕を防ぐために四角錐状に切り取ったなど諸説ある。

他にも階級ごとの規格があり、墓標は木柱が原則。ただし、軍規定の費用以下で出来るのなら石柱を使っても良い。（回答者：大阪府堺市立中央図書館）

以上のように、個人の墓碑の意匠や祭祀に対する国や軍隊の直接・間接の指導が見えてきました。先祖累代の墓ではなく、戦死者ひとりひとりに対して特有な形の墓に葬ることは、忠魂碑のように顕栄の意味もあったのかもしれません。

神道を想起させる墓標は、故人を悼むというよりも亡くなった後も軍隊機構に組み込み、遺された人たちも国策に取り込もうとしているように思いました。

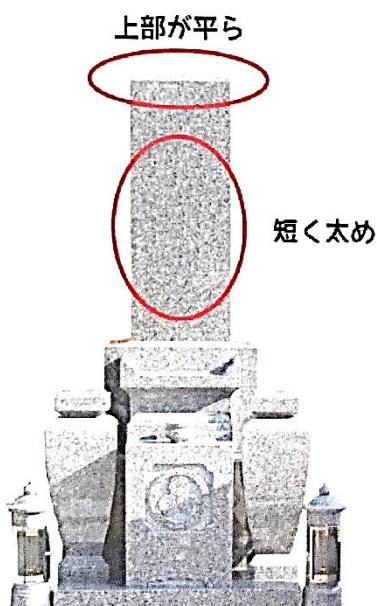
さて私の郷里の話に戻って、回答では階級で墓碑規格が違うようですが、田んぼの真ん中にある村の共同墓地なので、みんな同じサイズなのがしらと想像しました。

亡くなった祖母は、国からお墓を建てるお金が支給されたと話していましたが、事実かどうかはわかりません

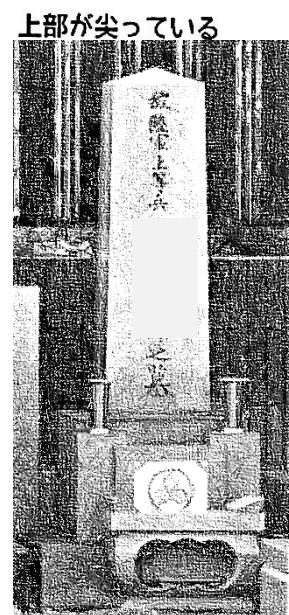
（祖父の勤務先の関係で戦前から外地にいたので村で行われる葬儀の場にもいなかったと思われます）。

ひときわ高く白く目立つ軍人墓…足を運べる時節が来たら、祖父母の墓参とともに訪ねようと思います。

一般的な「和型」のお墓



軍人が眠る「神道型」のお墓



資料調査

海軍瀬谷補給工場

ガイド 岸本 正

相鉄線瀬谷駅北側に位置する愛称「海軍道路」(現在環状4号線の一部)は我が家から国道246方面への抜け道としてよく利用する道路です。春には美しい桜のトンネルになることでも有名です。道路の西側は農業専用地区、東側は数年前に返還された米軍瀬谷通信施設跡の建物と草原、田畠やグラウンドなどが広がり、相沢川・大門川源流を含め市内でも広大な自然や農専地区が残る数少ない地区です。現在、一部が市民に開放されていて、米軍接收時にヘリポートとして使われていた土地などは休日には家族連れなどで賑わっています。来る2027年には「国際園芸博覧会(通称花博)」の開催予定地となっており、その後の再開発計画も検討されている所です。

八王子街道へほぼ直角に接続する約3kmの一直線の道路に、私はつい最近まで海軍によって滑走路として使われていた名残りとばかり思っていました。ところが滑走路としての使用も視野に入れてはいましたが、元々は物資運搬用の軍用道路として造成されたものであること、相鉄(当時は神中鉄道)沿線の他軍事施設との関連を色濃くもつことなどを知り、あらためてどのような施設がこの場所にあったのか調べてみました。

そのための資料として『地図で辿る瀬谷の移り変わり』(横浜瀬谷地図くらぶ編 2004年刊)を参考にしました。主に各種地図を元にして地元の歴史を紹介していますが、防衛研究所や国立公文書館所蔵の一次資料にも当たっていることなどから信頼性の高い内容と思われます。以下主にそれによる情報をまとめました。

まず、施設の名称ですが「瀬谷補給工場」の他、「横須賀海軍資材集結所」「第二海軍航空廠補給工場」「横須賀海軍軍需部火薬庫」などとも記されている資料もあります。位置や管轄の違いによるものと思われますが「工場」というより火薬や爆弾を保管し海軍航空隊へ補給する役割を担っていたといいます。1941年に主要航空隊付近に航空廠が設けられ、兵器の補給、修理や飛行機の整備、輸送などに当たったとのこと。組織上「瀬谷補給工場」は木更津にあった第2航空廠の指揮下にあり、1941年から造成、43年に開隊された厚木飛行場

(相模野航空隊)や1944年に開設された高座海軍工廠と密接に関連していた施設といえます。つまり「厚木航空隊に関連し、その補給基地をはじめとする横須賀鎮守府の各種施設の補給施設および保管施設として機能していた」(同書)と考えられるといいます。

具体的な施設として、特徴的なのは火災防止のため蒸気機関車でなく蓄電池機関車による引込み線が瀬谷駅から現在の海軍道路の東側に敷かれていたことです。軌道の跡は現在歩道となっているようです。博覧会や再開発に向けても同じ位置に何らかの交通システムが検討されているようですが、既に戦前から物資運搬目的の軌道が敷かれていたわけです。

防衛図書館資料によると、現在の上瀬谷小学校北側に入口があり、その付近に守衛所や衛兵控所と事務所や車庫が、八王子街道との接点付近東側にメイン施設



である十数棟の火薬庫・爆弾庫が、西側にも空弾や部品倉庫があつたようです。

興味深いのは、火薬や爆弾だけでなく、信管・落下傘・実弾・プロペラ・機銃・発電機などの航空物資と思われる部品類も保管されていた事実です。近隣の高座海軍工廠などで調達された物資が、必要に応じて厚木飛行場の航空隊に補給されていたことが想像されます。さらに、酸素発生装置や毒ガス弾を格納していた覆土式の特薬庫があつたことも記録されています。

現在遺る遺構としては、国道16号線との接点付近に見られる一辺が8m正方形の巨大なコンクリート製構造物、これは防火用水槽と推定されます。またそのすぐ近くに4基の基礎コンクリートブロック、これは油類などを入れた円筒形の容器を支えていたものと思われますがそれぞれ明確な用途は不明です。これらは現在フェンスの中にありますが遠目に観察できます。

また、毒ガス弾を格納していた特薬庫、煙突基礎、覆土式特薬庫の掩体壕が遺るといいます（季刊「横濱」2017秋号）。しかし、現在その多くはフェンスに囲まれていて、近寄ることはできません。花博の計画に伴ってこれらの遺構は近い将来消滅することになるかもしれませんので、今のうちに記録保存が望れます。

戦争直後の米軍航空写真（国土地理院所蔵）を見ると、これら倉庫群の一部や引込み線の線路跡と思われるものが写っていて、ある程度正確な位置関係が分かります。今後機会があれば、地元住民やこの場所に勤務していた方々の証言を得たいと思っています。

市当局（瀬谷区役所区政推進課、都市整備局上瀬谷整備推進課など）は博覧会準備に余念がないようですが、この地が米軍接收時以前に日本海軍によって使われていた事実と戦争遺跡として一部遺構が遺ることをよりPRしてもよいのではないかでしょうか。



煙突基礎と思われる遺構

2021.10.13 13:11
撮影岸本



報告

小笠原の戦争遺跡～母島～

ガイド 中田 均

小笠原の戦中・戦後について概略です。『小笠原戦跡一覧』

(待島亮 創英社/三省堂書店 2003)

1941年開戦時、陸軍の父島要塞司令部と海軍の第五艦隊第七根拠地隊が配備され、中部太平洋の防備にあたった。

～戦争の長期化により父島要塞司令部は第百九師団に、第五艦隊第七根拠地隊は父島方面特別根拠地隊に改編され戦力が増強された。1944年6月、第百九師団は「小笠原兵团」として大本営直轄となつた。司令部本部は硫黄島に設置された。

～米軍による空襲が激しさを増し、島民の大半は内地に疎開することになった。

その一方で兵員は推定42,000人に増強され、島の要塞化が急速に進められるようになりました。

～サイパン島玉碎以降、米軍の攻撃目標が硫黄島になりますとその後方支援となる父島・母島でも陸海軍ともに戦力増強・陣地構築に狂奔することになりました。

1945年8月、米軍に海上封鎖されながら、敗戦。戦後的小笠原は23年間米国の統治時代を経験しました。

まるまる2日間

母島までのアクセスは、竹島桟橋から父島まで「おがさわら丸」で約24時間、さらに父島二見港から母島沖港まで「ははじま丸」で2時間。自宅を出発して民宿の宿までまるまる2日間かかりました。多くの砲台が残されているという期待していました。しかし、「ははじま丸」から見た母島の第一印象は、山並の姿は鋭く海岸まで迫っていて、はたして海面絶壁にある「海面砲台」にたどり着けられるだろうか、正直ビビリました。結果、無理をせず、静沢の要塞で1門と東港探照灯下（六本指地蔵下）で3門をあわせて計4門を確認しただけでしたが、いずれも海軍の「12糰（センチ）高角砲」で予想以上大きな砲台で存在感も大でした。

東港探照灯下陣地高角砲

バイクで東港に向かって遠出しました。誰も通らない道路を下り薄暗い林の中を行くと、道路沿いに「六本指地蔵」や「探照灯基地跡入口」という標識案内がありました。すぐに道路脇にある探照灯格納庫を見つけることができました。コンクリート製格納庫の中に探照灯と電源車の残骸が残っていました。直径150センチの車輪付の探照灯、奥には車の残骸があり、探照灯の牽引・照明に使用された電源車でした。車にはハンドルが着いていました。腐食がひどい状態でしたが、実物を直に見たのは初めてでした（写真①）。

道路脇にある「砲台跡地入口」という案内標識からジャングルに降りると、結構広い平地になっていて整備されたルートに沿って歩くと「十年式12糰高角砲」が3門、据え付けられた状態で残っていました。東港防衛のための砲台でした。この陣地は、高所から敵の艦船を砲撃し、かつ対空にも対応するために土手で陣地を作り砲台を据え付けた露天陣地砲台です（写真②）。3門ともすべての砲身先端が破壊されていました。戦後使用不能にするための米軍の仕業でした（写真③）。砲弾が込められ敵艦に向けて火をふくことはありませんでした。



写真①



写真②



写真③

小笠原の戦争遺跡～父島～

素朴な母島とはうって変わって、父島は大村エリアのメインストリートに行くと生協などスーパーや郷土料理店、観光直売所、フリーショップなどが立ち並びおしゃれな観光地でした（母島の人口460人、父島は2100人）。次に「小笠原をめぐる人々の歩み」を紹介します。

- 1944 島民約7700人のうち約6900人が本土に強制疎開。残りの島民は軍属として徴用。
- 1945 米海兵隊が硫黄島上陸。日米で約2万9000人の戦没者を出す。米軍の占領下に。
- 1946 米国、欧米系島民家族にのみ父島への帰島を許可。引き続き米国施政権下に。
- 1968 6月26日小笠原諸島返還。 小笠原村観光協会「ガイドブック」から

清瀬トンネル（遊歩道）

二見港から清瀬エリアに向かってショートカットできるトンネル（遊歩道）があります（写真④）。清瀬隧道といい戦時中は防空壕として使用されていました。トンネル出口近くで掲示された2枚の案内文を見つけました。「小笠原今昔ばなし5　トンネルにある木の扉」という「村民だより187号」（昭和59年3月1日）からの引用でした。この「村民だより」から一部を紹介いたします。



写真④

「清瀬・大村両トンネルは昭和11～12年頃に開通しています。昭和19年6月15日。もうすぐお昼といった頃、雲の中から現れた敵機から爆弾や焼夷弾による爆撃が始まりました。」

「『空襲の時にはゴザを持って清瀬隧道へ避難するように』と決められており、その際には各隣組（班）を指揮する群長さんのもとでお年寄り子供を最優先に避難させるという手はずになっていました。」

「今は内側の木の扉しか残っていませんが、当時は外側にも鉄製の扉があり、二重に閉じるようになっていました。」

出入りするのは側につくつてあるコンクリートの口をくぐったものです。清瀬側の木の扉と鉄の扉の間には野戦病院が設けられ、負傷した人達の手当が行われました。」

「焼き出しをする余裕は無く、空襲警報解除に自宅に食事を作りに帰りました。次の空襲を恐れて幾日間かトンネルに泊まつた人も多く、焼け出された人も親戚などへ身を寄せる間、トンネルに寝起きしていました。」



写真⑤

夜明山高射砲陣地

標高 307 メートルの夜明山は、父島では中央山に次ぐ 2 番目の山です。夜明山一帯には、高射砲陣地が構築されました。首無尊徳像を右手に無線施設の白い建物脇から夜明山山頂ルートを登ると「トロッコ壕」があります。壕内に入ると蛇行気味の細長いスロープを過ぎるとレールのあるトンネルになります。どこまでもレールは敷かれたままであります。『小笠原戦跡一覧』(待島亮)によれば、レール幅 64 cm、全長約 80m で、「運ばれた物資をこの壕を使って搬入したと思われる」。写真⑤は、トロッコレールとトロッコの車輪です。

もう一枚の写真⑥は、明治 41 年に制定された歩兵戦で活用された「四一式山砲」です。戦後米軍は、配備されていた野砲・山砲を海中へ投棄するよう命じましたが、洞窟にあったせいか処分されなかつた山砲でした。分解して馬で運び陣地で組み立てて使用する軽火砲でした。



写真⑥

連載

日吉第一校舎ノート（23）『僕の昭和史』（その1）

会長 阿久沢 武史

教室から学生が連れ去られた当時、組織的な活動としての共産主義運動は、すでに実質的な形を成していなかった。昭和8年（1933）には日本共産党中央委員長が獄中で転向声明書を発表し、それが党員の大量転向を加速させる。学生にとっては「もう指導部はどこにもないのだ。各人がおののの持ち場でもちこたえて行き、少しでも運動をひろめて行くことよりほかない」（『若き日の詩人たちの肖像』）という状態だったのである。堀田善衛はレーニンを耽読していたものの、決して急進的な左翼学生ではなかった。彼の志向は詩作に向かい、文学を通じて友人たちとの交流を深めていく。

安岡章太郎は『僕の昭和史』で、堀田を含む「若き詩人たち」について次のような印象を述べている（新潮文庫、引用は以下同）。

堀田善衛の自伝小説『若き日の詩人たちの肖像』などを読むとハッキリ感じられるのが、とにかく昭和十一年、二・二六事件のとしに慶大予科に入学した堀田氏たちは、鼻下に美髯をたくわえた明治時代の大学生の伝統を多少とも受けついだところがあった。ところが、それから四、五年たって同じ学校に入学した僕らは、鼻下に美髯どころか、頭髪をのばすことも許されず、丸坊主の頭に軍帽まがいの学生帽をかぶり、週に一度はズボンにゲートルを巻いて登校しなければならなくなつたのだ。

安岡が文学部予科に入学したのは昭和16年（1941）4月である。堀田が入学した4年後、時代はさらに戦時の色を濃くしていた。安岡にすれば、堀田の友人たちは「考えられないくらい早熟な人たちの集まり」であり、「しかし本当は、早熟晚熟といった個人的素質や才能の問題というより、多分に時代環境の違いというべきだろう」ということになる。わずか数年で、予科の学生を取り巻く「時代環境」は確実に変わっていたのである。

安岡もまた堀田と同様、授業にはあまり出席していなかったようだが、『僕の昭和史』では予科の教員や授業の様子がしばしば回想されている。安岡の1・2年次のクラス担任はフランス語の高橋広江で、パリがドイツに占領された時には教壇の上で泣き伏したというが、軍属として仏印に行き、帰国してからは人が変わったように急進的な国家主義者になっていた。この教師もまた「時代の環境」に傷つけられた一人で、「教壇の上でヒステリックに荒れた言葉を吐いたり、ふさぎこんだり」していた。高橋は休講が多かったが、漢文の奥野信太郎や西川寧といった教員たちも同様に休講が多かった。予科生について言えば、「一とクラスの定員五十人のうち、出席率のいいときで三十人ぐらい、悪いときには十人内外しか出てこない。これは慶應に限らず、私立大学の文科はどこでもこんなもの」だったという。そして安岡が見た日吉キャンパスは、「電鉄会社から無料で提供された無人の丘陵に、鉄筋コンクリート建の兵営のような校舎がヤケに目につく」場所だった。ギリシア古典主義の流れを汲む白亜の美しい校舎は、「兵営」のように彼の目には映っていたのである。

僕らのような怠け学生もさることながら、一般の勤勉な学生たちも、戦争という国家非常の時代の激動している社会を考えると、それは何ともエタイの知れない非現実的な集団におもわれた。日吉の駅を下りると、両側に痩せこけたイチョウ並木のある道路を埋めつくして、真っ黒い制服制帽の学生たちが真っ黒くむらがつたまま、丘の上の校舎に向かって歩いて行く。近づいて、一人一人を見れば、それぞれ良家の子弟というにふさわしい顔立ちをしており、なかには秀才だっているに違いないのだが、こうして黒い川のように流れて行く集団を見ると、それは機械的な手段で大量生産される家畜の大群といったものでしかないようだった。大量生産はいいとしても、このなかでいまの時代に即応して何とか役に立つのは何パーセントぐらいだろうか？ 医者の卵、技師の卵、会計士の卵、弁護士の卵、教員の卵……。しかし、その大半は本当は軍人の卵、下級将

校や下士官の卵としてそだてられているのではないか? そう思うと、僕らのように文士の卵のそのまた卵のような者は、この大集団のなかでは、まったく存在する価値も理由もないもののように考えられてくるのであった。

自らを無用の存在と感じる安岡のまなざしは、教師や同級生、そして学校そのものに対してきわめてシニカルである。「機械的な手段で大量生産される家畜の大群」というのは言い過ぎだとしても、学生たちはそれぞれの未来の可能性を奪われ、やがて徴兵猶予が停止され、学徒出陣で戦場に行く日を迎えることになる。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第47号(2016年)に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート(三)予科の教育(前編)」の再録となります。

連載 地下壕設備アレコレ【32】第300設営隊その後 —最後は長野で大本営海軍部地下壕を掘削—

運営委員 山田 譲

日吉の海軍地下壕を最初に掘ったのは第300設営隊です。第一校舎の脇に2本の「待避壕」を築造しました。1944年7月のサイパン陥落直後のことです。その後、9月になって連合艦隊司令部地下壕を、第3010設営隊とともに掘りはじめました。日吉にいた時は、まだ横須賀海軍施設部第1部隊(7月15日編成)でした。第300設営隊と名称変更されたのは1945年1月5日です。

隊長は山本将雄技術大尉。他に3人の技術大尉と技師1人、主計大尉が1人いました。さらに技術曹長が4人、兵科の兵曹長が3人。いかにも技術屋集団という感じです。おそらく兵士たちも土木・建築業の経験者・熟練工だったのではないかと思います。山本隊長は東大工学部土木科出身、日大工学部教授を経て満洲のダム工事の設計主任官をつとめ、昭和18年に海軍施設本部に軍属として着任後、設営隊の隊長として武官に任官した土木工事のエキスパートでした。日吉で「Z8工法」の開発も手がけました。

この設営隊は『海軍施設系技術官の記録』によれば、秋には日吉を離れて館山航空基地飛行場の隧道築造にあたりました。これは艦上爆撃機5機収納の大型地下格納庫です。この築造はいわば試作で、次に1945年1月からは、横須賀市夏島でゼロ戦40機分の地下大格納庫、野島では双発爆撃機「銀河」20機、ゼロ戦20機収納という超大型地下壕を築造しました。

その後、東京都港区高輪の高松宮御殿の防空壕を1週間で築造し、そして最後の仕事が長野



でした。「長野大本営海軍側地下作戦室設営極秘着工後終戦」とのことです。山本将雄氏の回想文には、「松代大本営用地下工事に対応して、之と別個に海軍側首脳部2000名が入るべき大工事の施工に着工していた」と書かれています。

◎長野市安茂里(あもり)の海軍地下壕築造に着手

この「大本営海軍部壕」の調査・保存・公開の活動をしている「昭和の安茂里を語り継ぐ会」が、今年6月にパンフレットを発行しました。これによると、表向きは「海軍東京通信隊第5分遣隊」使用予定の施設として、地下壕の掘削が始まられたそうです。以下、この冊子に書かれていることを紹介します。

1945年6月21日、長野県安茂里村（現・長野市安茂里）小市に第300設営隊がやってきて、「大本営海軍部壕」を掘りはじめました。この土地は長野盆地・善光寺平をはさんで、松代町（現・長野市松代）の大本営陸軍部・政府諸機関・天皇御座所地下壕の北側に位置しています。さらに安茂里地下壕の北側には、皇太子・皇太后的避難壕も計画されていました。

その設営隊は上記の通り第300設営隊で、小市地区の無常院、稱名寺は隊員宿舎となりました。岡本半一郎宅には山本隊長が宿泊し、10月まで小市にいたそうです。この半一郎さんの娘さんたちの話では、山本隊長は「とてもやさしい人でお風呂が熱くても文句を言わなかつた」そうです。本堂に寝泊まりしていた兵隊たちは、8月15日の玉音放送の時には「声もなく静まり返った中で神妙に聴き入って、ほとんどの人が肩を落としていた。『いろいろありがとうございました』と言い残し、翌16日には撤収した」とのことです。

では安茂里の海軍壕はどのようなものだったのでしょうか。現存するものは、奥行き100mほど、幅3m位、高さ2.5mで、入口から約20mで崩落していて奥には入れません。それにしても、6月に来て2ヶ月間で掘ったのが100mというのは、どういうことでしょうか。その穴も素掘りのままのようです。他の所でも穴掘りをしていたのでしょうか。

何やら「本土決戦」のために必死で働いていた感じがしません。玉音放送の時の軍人たちの様子も、淡々と敗戦をむかえた感じです。山本隊長は敗戦を覚悟していたのかもしれません。そのあと8月25日には早々と工事した土地の補償支払いをすませ、きちんと後始末していったそうです。

◎東京通信隊も安茂里に駐屯

小市地区には海軍東京通信隊も駐屯し、隊長は菌田美輝（みてる）中佐でした。菌田中佐は安茂里村長だった塚田伍八郎宅に宿泊していました。日吉の連合艦隊司令部にも通信兵がいたように、軍令部には必ず通信隊がいます。しかし、この菌田部隊のことはよくわかりません。先に書いた「海軍東京通信隊第5分遣隊」なのではないかと思います。

『元軍令部通信課長の回想』（鮫島素直著）によれば、「六月には大本営移転の場合に備えての中央通信施設の松代地区への整備工事も、八月末完成を目指されたが未完のまま終戦となつた。」「六月には、大本営移転の場合も考慮した陸海軍共同施設計画に基く中央通信施設をすでに概成している松代地区の地下トンネル内に整備する工事が八月末概成を目指に始められたが、未完のまま終戦となつた。」と書かれています。ここに書かれている「松代地区」が、どういう範囲の地域を指すのか、安茂里も含むのかはわかりません。いずれにしても、この菌田通信隊と第300設営隊は連動していたのだろうと思います。もしかすると第300設営隊は松代町の方の地下壕も掘っていたのかもしれません。

この菌田中佐が宿泊していた塚田家の子孫である塚田佐さんは、長野オリンピックの時の長野市長で、「昭和の安茂里を語り継ぐ会」の顧問もつとめられています。昨年2月の集いで塚田さんは「民族の悲惨な体験は75年たつと忘れられるというが、なんとなくきな臭い今がそうなのだ。小市の山に海軍が穴を掘るという馬鹿げたことを本気でやっていた。この事実は後世にしっかりと伝えていかなければならない」と訴えられていたそうです。塚田佐さんのお宅には、大きな海軍金庫が残されていましたが、これを「語り継ぐ会」に寄贈されました。

この会では地下壕そばに資料館を建て、地下壕の一般公開も計画しているとのことです。

大本営陸軍部壕など、そして海軍部壕などの調査に
高校生・住民と“ご一緒に”して38年余り
たどりついた現時点でのとらえ方

**「松代大本営」は
「長野大本営」！と**

呼び変えた方が………

草木が鬱蒼と茂った様の入口
作業三回目、階段の手すりを作る
整備なった海軍部壕入口

早速見学会、松ヶ丘小学校を招いて実施、説明する西村代表と補助の岡村豊さん

—壕の常時公開は「神様がくださった贈りもの」—

大本営海軍部壕の常時公開を記念しての冊子

昭和の安茂里を語り継ぐ会
事務局長　土屋光男 著

連載

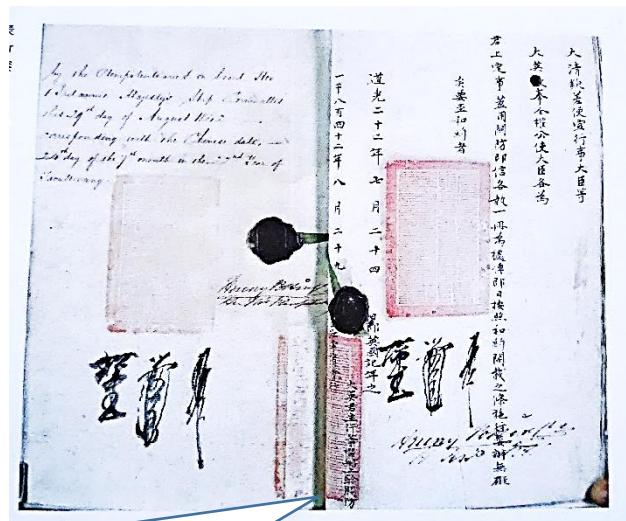
海外の戦跡めぐり (18) 阿片戦争と南京条約 中国

運営委員 佐藤宗達

中国では明代末期から阿片吸引の習慣が広まり、清代の1796年には阿片の輸入が禁止となる。しかし以降19世紀に入ってからも何度も何度となく禁止令が発せられたが、阿片の密輸入は止まず、国内産阿片の取り締まりも効果がなかったので、清国内に阿片吸引の悪弊が広まった。当時の英國は清国から茶、陶磁器、絹を大量に輸入していたが、清国に輸出する製品が少なく、英國の大幅な輸入超過であった。そのため英國は植民地・インド産の阿片を清国に密輸出する事で超過分を相殺した。

清国にとっては英國からのインド産阿片の輸入が増加し、購入の決済に用いる銀の流出が増加して財政を圧迫する事態になった。時の皇帝：道光帝は阿片を厳しく禁止し吸引した者は死刑に処するものとすることで、風紀を肅清し阿片の需要も消滅させ銀の国外流出も絶つ厳禁論を採用して1838年林則徐を欽差大臣に任命して廣東に派遣して阿片密輸の取り締まりを命じた。林則徐は阿片密輸に対して非常に厳しい取り締まりを行い1839年3月廣州の外國商人たちに、今後、一切阿片を清国国内に持ち込まない旨の誓約書を提出させ、保有する阿片を供出するよう要求した。

林則徐は1,400トンを超える阿片を没収・收容して、専用の処分池を建設して20日間かけて処分した。今はこの池の跡地には林則徐博物館が建てられており阿片戦争関連の資料が展示されている。英國はこの処置に対抗するため1839年10月英国内閣は遠征軍派遣を決めた。一方、阿片の密輸を増長させる派遣には反対意見が多く、議会での出兵予算案は賛成271票、反対262票という僅差であった。1840年8月英國艦隊は清国沖に到着、以後1842年7月まで断続的に各地で戦闘があり英國軍の軍事力の前に清国は屈した。1842年8月29日（道光22年7月24日）中英江寧条約（南京条約）が締結、香港島割譲、賠償金の支払



南京条約の中英両国代表の署名のページ

署名しているのは

英国全権代表：ポッティンジャー

清国全権代表：Ki-ing 欽差大臣（皇帝の全権委任を得て対処を行う高官）。

維多利亞女皇時
帝國國徽の銅質
多利亞女皇肖像の
「南京條約」附Victorian Period,
bronze Royal Se
Britain, with the
Nanking.

江寧條約（俗稱「中英南京條約」）
載明：清廷將香港島割讓於英國
日期：道光二十二年七月二十四日
日期：道光二十三年六月二十九日
件，中・英文合璧本，外交部藏。）

南京条約原本には両国のSEALがあり、清国は押印、
英國はヴィクトリア女王肖像画の封蝸を添えております。
封蝸の先は原本の中に挿入されており、中英両国代表の署名のページ
に先端が覗いています。



い、広州ほか5港の開港、貿易の自由化、が決められた。しかし阿片についてはなにも言及されておらず、その後も外国からの阿片の流入と銀の流出が止まらなかった。

清国はこれに対抗するために、清国内の西北部と西南部での芥子の栽培と阿片の生産を奨励する政策を打ち出した。国内の阿片の生産増加により銀の流出は改善されたが、国内の阿片吸引者が爆発的に増加してしまった。こと香港については1860年10月中英綱増条約で九龍半島の沿岸部分の割譲、1898年7月中英展拓香港埠址專條で九龍・新界地区の99年間租借が決められた。そして1997年7月香港は中国に返還された。

返還時、南京条約他2件の原本3点が受け継いだ中華民国によって台北市内で展示された。筆者も現物を観る機会があり155年前のペン字、墨筆、朱印、それと英國女王のシール、歴史の重さを実感しました。

お知らせ

コロナ感染対策で、こんな風に案内しています（慶應義塾高校の見学会から）

副会長 喜田美登里

10月28日 1年J・G・Oクラスのガイドです。事前に授業でガイダンス終了済。

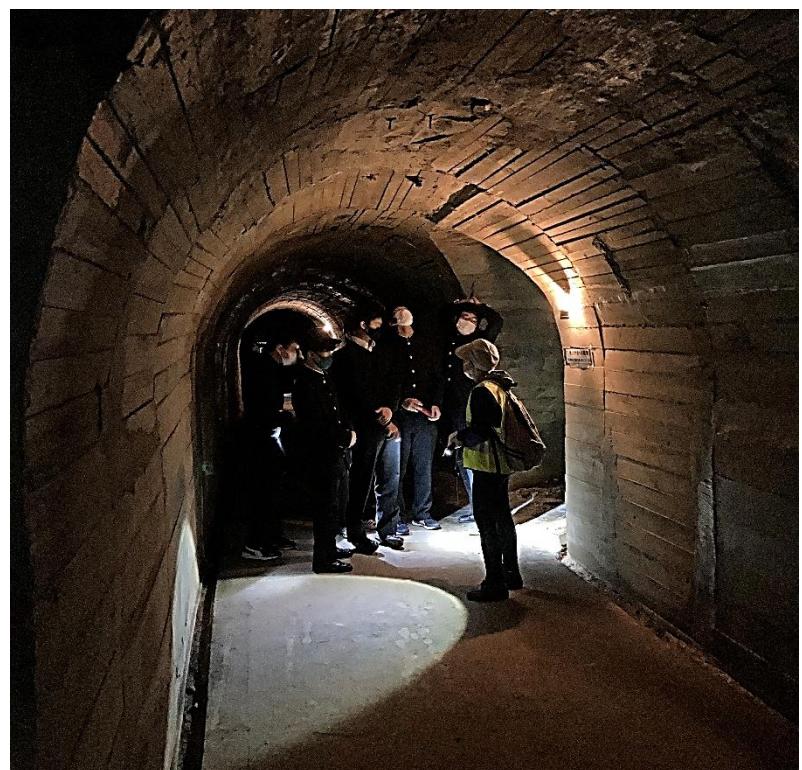
- ・9時20分～10時10分 J組40名
- ・13時～13時50分 G組38名
- ・14時～14時50分 O組37名

毎回、クラスを1班6～7名に分ける。各班にガイド1名が付く。（ガイド11名参加）班は1分間隔で出発し、地下作戦室などでの集合説明は無し、各ポイントで短い説明。壕内見学時間は実質30分程度。各クラス時間内に終了し、ポイント説明でも「意外にゆとりがあった」とはガイドの感想です。「密」にならない見学方法です。

おまけ「暗闇体験」

地下壕はライトが無ければまったくの「闇」なので、見学の終わりにライトを消して日常に体験できなくなった「暗闇」を体験する事は以前からありました。ただ、小学生などにはこの戦争遺跡について誤解する可能性もあり（暗闇のインパクトの方が強くなってしまった…）最近はあまり実施していません。今回見学を終えた帰り道、Bブロックとの境「倉庫」と言われている狭い細長い小部屋でライトを消しました。「闇」に耐え切れず、すぐライトをつけたグループもあったようです。

今回のクラスは阿久沢会長の国語のクラスです。授業で芥川龍之介の「羅生門」を読んでいるそうです。主人公の「下人」が駆け下りていった、羅生門の夜の底『黒洞々（こくとうとう）たる闇』を実感できたでしょうか？



活動の記録 2021年8月～11月

- 8/16(月) ヤフーニュースに取材記事
(対応 阿久沢会長)
- 8/25(水) 会報147号発送(慶應義塾高校 多目的室)
- 9/2(木) 地下壕見学会 慶應大学 先生1名 4年生
1名 見学後、ガイドがインタビューを受けた(来往舎小会議室) *卒業論文参考
資料として
- 9/23(木) ガイド学習会(日吉地区センター)
- 9/29(水) 「慶應塾生新聞」の取材(対応 阿久沢会長)
*掲載は12月
- 9/30(木) 運営委員会(来往舎小会議室)
- 10/2(土)・3(日) 第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会(東京都東大和市)「コロナ」の影響
下、昨年は中止となり、今年「リモート」で開催
2日、3日(全体会・分科会)の両日共、約100名が
参加した
- 10/16(土) PowerPointチーム会合 出前授業
リハーサル(中原市民館1階フリースペース)
- 10/28(木) 地下壕見学会 慶應義塾高校 1年
G組・J組・O組 115名
- 11/4(木) 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室)



第一校舎迷彩の痕跡



足探りのコサギ



秋のコスモス

○地下壕見学会について

緊急事態宣言解除後、個人・団体から見学会のお問合せをいただいている。11月現在、日吉台地下壕見学会は再開未定です。
慶應義塾関係者の見学は、感染対策をしながら実施しています。

★お問合せは見学会窓口まで

Tel/Fax 045-562-0443
喜田(午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 Tel 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 Tel 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

発行 日吉台地下壕保存の会

代表 阿久沢 武史

日吉台地下壕保存の会運営委員会

(年会費) 一口千円以上

郵便振込口座番号 00250-2-74921

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会